
メンソール

ゆきのん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メンソール

【Nコード】

N5772T

【作者名】

ゆきのん

【あらすじ】

別れてしまった恋人の懐かしい匂いを感じた気がした。

彼女の前に枯れが現れることはもう二度とないと理解していながら、膨らむ期待を抑えることができない。

思わず声をかけてしまうが…。

すれ違った時に、確かに感じた。
彼がいる。

そう思って急いで振り向いて、目に付いた男性に声をかけた。

「あのっ……」

男性が振り返る。

懐かしい匂いがした。

ヘビースモーカー特有の煙草の匂い。

体になのか衣服になのか知らないが、うつってしまっているあの匂い。

「何か？」

なのに。

振り返ったその顔は彼ではない。

彼は変なところで律儀な人間だった。

歩き煙草は平気でも、他人の家や車では絶対に吸わない。

煙草の匂いが染みついた服を着て、彼女の部屋に上がり込む割にその部屋の中では絶対に吸わないのだ。

同じことじゃないかと笑っても、彼は全然違々と真面目な顔で答えた。

彼に曰く、自分の持ち物や自分のエリアではないところに匂いをつけるのは失礼なことなのだそうだ。

力説する彼を可愛らしく思いながら、動物みたいね、とからかうと彼は決まってこう答える。

「人間だって動物だ」

それはそうだけど、と彼女は苦笑する。

人間にも縄張り意識はあるが、マーキングという行為は一般的でない。

ましてや匂いでマーキングなどとまるで犬ではないか。

それに、彼の吸っている煙草は彼のオリジナルというわけではない。

市販されている上に、メジャーで吸っている人間も多いものだった。

そんな匂いはいつどこで同じものと出会うか分かったものではない。

それでも彼は匂いをつけないという点は絶対に譲らなかった。

事実、今の彼女の部屋に彼の匂いはまるで、ない。

彼と彼女が付き合い始めて季節がぐるりと巡った頃。

彼女は一周年だからということ、何かしようと彼に持ちかけた。

彼は目を閉じて逡巡し、やがてこう聞いてきた。

「何か食べたいもの、ある？」

食事に連れて行くという意味だが、どんな記念日にも彼はこう繰り返してきた。

景色の綺麗なところへ連れて行ってくれたり、美味しい食事をご馳走してくれたりと、気は遣ってくれる。

だが、彼女にはこの一年を通じて彼からモノをもらったこと経験が一度もなかった。

「たまにはわたしの欲しいもの、買ってくれたりしないの？」

彼は曖昧に笑って、頭をかいた。

答えたくない時やどう答えていいか分からない、といったときに彼が見せる表情だった。

そんなに迷惑な要求だったろうかと彼女は内心で首を傾げたが、彼を困らせたくて言ったわけではない。

ただ、不思議だったから聞いてみただけなのだ。

「ごめんなさい、言ってみただけだから」

謝って彼の腕を取る。

頭を切り換えて、今日は何がいいかしら？と話しかけた。

彼はやっぱり曖昧に笑ったまま少し間を置いて、何でもいいよと答えた。

一瞬のその間に、彼は少しだけ口を動かしている。

ごめん、と。

彼女は彼の口の動きに気付かなかったけれど、今では彼が謝った意味を知っている。

「あの、私になにか？」

話しかけられた男性は困惑していた。

呼び止められた気がして振り返ってみれば、女性が切羽詰まった表情でこちらを見ている。

ぶつかってしまっただろうかと不安になったが、その割に女性は何も言っていない。

しばらくは向こうの出方を窺っていたが、徐々に焦れて再度用件を尋ねた。

「あ、その、すみません。わたし、人違いで…」

男性は自分が何もしていないと分かって安堵したが、同時にそれだけのことを言うのにどれだけ時間をかけているのだと苛立ちも覚えた。

失礼、と一言ことわって立ち去っていく。

多くはないがそれなりに人通りのある道で立ち止まってその男性の後ろ姿を見送る彼女。

通行人が不審げに彼女を見ているが、気にした様子もなかった。

やがて人々の間に男性の姿が消えると、彼女はぽつりと呟いた。

「なに、やってるんだろ」

あの頃の匂いがしたと思って。

もしかして帰ってきてくれたんじゃないかと思って。

もう一度会えるんじゃないかと思って。

ほんの一瞬、期待してしまったら止まらなかった。

痕跡なんて記憶の中にしかない。

彼がくれたのはすべて思い出だけだったから。

思い出させるような痕跡は何一つないのだ。

時間が経てばいずれ朧気になって、いつか何かのきっかけで思い出した時には輪郭だけしか残っていないくて。

痛みや悲しみがあったことも忘れて、朧気な美しさを味わうことが出来たはずだった。

そして、それが彼なりの気遣いだったはずだ。

ほとんどの部分で成功していた彼の気遣いは、たったひとつの致命的なミスがあった。

彼に染みついていたあのどこかすっとするような匂いは、どこにでもあるようなありふれた匂いだったから。

彼がいた場所に残さなくとも、いつかどこかで簡単に出会えてしまうようなものだった。

「あれ、おかしいな…」

風化して美化される前に、その匂いに出会ってしまった彼女は。

我知らず流れる涙にようやく気が付いた。

しかし、止めることは出来ない。

どこでその匂いに出会っても、心が求めているたった一人に出会うことはもう、ないのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5772t/>

メンソール

2011年10月9日01時32分発行